

・ < 研究ノート >

1 . アイルランド・スポーツにおけるジェンダー・女性研究にむけて

坂 なつこ

はじめに

本稿ではアイルランドにおけるスポーツとジェンダー関係についてとりあげる。アイルランドはヨーロッパのなかでも、とりわけカソリック教会の影響が強く、女性の社会的活動が制限されてきた。そのような社会における女性とスポーツについてどのような関連がみられるのか考察する。

1 . アイルランド女性とカソリック教会

アイルランド女性研究を概観するにあたって、カソリック教会との結びつきを無視することは不可能である。英帝国の支配の下、独立国家設立のためのアイデンティティを支えてきたもっとも大きな柱の一つは、カソリックとしてのアイルランドだったといえる。カソリック教徒への様々な差別やプロテスタントへの改宗の抑圧にもかかわらず、カソリック教会はアイルランド社会において重要な役割を果たしてきた¹⁾。社会規律としてのカソリック教義は、20世紀になり国家の独立とともに、道徳としてだけでなく社会制度として憲法にも明記され、共和国の土台となるのである。そのもとでは、女性は社会的に制限された存在であった。1922年自由国誕生ののち、1925年には離婚の禁止が憲法に記されるが、それは以前には多くの条件を伴いながらも認められていた「結婚の解消」を禁止するものであった。1937年共和国憲法では「女性の居場所は家庭である」とされ、既婚女性の職業は大きく制限された。公職につけるようになるのは、1965年になってからである。これらのことは、女性に経済的に自立した生活を

送ることを困難にさせた。継続が困難な結婚であっても離婚することはできず、女性は家庭にとめられる。むしろ、家庭を持つこと、それを守ることが女性の最大の務めという教会の教えは、深く人々の信仰とともに根づき、法にささえられ、社会生活を支配していくのであり、それが女性にとっても男性にとっても自己像となっていくのである。T. イングリス (Tom Inglis) は、女性が母親として娘として、カソリック教会の倫理、性別役割価値を再生産、世代継続して行った側面を指摘している²⁾。また、大野は、1995年の離婚合法化をめぐる国民投票の際、農村部では女性からの反対票が多かったことにふれ、離婚の承認が「女性の居場所」を脅かすのではないかという不安の現れとみている³⁾。

2 . フェミニズム運動の広がり

1960年代にアメリカを端緒として広がる「第一次フェミニズム運動(ウーマンリブ)」は、アイルランド社会にも様々な変化の兆しをもたらす。その動きは非常にゆっくりとしたものであったが、確実なものであった。例えば1970年の「避妊列車(Contraceptive Train)」は、女性運動家たちが電車に乗ってベルファストに避妊具を買いに行くという示威行動であった。当時上院議員のM. ロビンソン(Mary Robinson)は、弁護士時代から女性やマイノリティの権利問題に積極的に関わってきていたが、避妊合法化の法案を提出し、女性運動を推し進める原動力となった⁴⁾。後に初代女性大統領に就任する(1990年)ロビンソンは、女性運動において大きな役割を果たした人物の1

人である。アイルランドの大統領は政治的な実権をもつものではなく、国民投票を求めることができるが、外交上はいわば象徴的な存在である。だがロビンソンはその立場を大いに活用し、EU 人権委員会などの外圧を梃子に、女性の権利向上のために活躍した。1995 年には、国民投票によって、賛成 51%、反対 49%という僅差とはいえ離婚が合法化された⁵⁾。この時期にロビンソンの活動によって、女性の社会的地位に関する様々な政策が推進され、女性の権利は大きく拡大していった⁶⁾。例えば、15 - 63 歳の女性の雇用率は、1994 年の 40%から、2004 年には 56%に上昇している。二代続けたの女性の大統領、国会議員（大臣）や企業の幹部における女性の割合が高いことなどによって、2008 年「世界経済フォーラム」による男女間格差の報告書においては、アイルランド共和国は 8 位となっている（ちなみに日本は 98 位）。

他方でカソリック教会と国家制度のつながりは徐々に変化してきた。1973 年には、教会の地位を憲法において保証してきた部分が削除される。C. コールター（Carol Coulter）は、60 年代以降に強まるマスメディアによる教会批判が人々に与えた影響について言及している⁷⁾。変化する生活様式や新たな人権意識を持った人々がそれに呼応したともいえるだろう。80 年代になると教会の運営する学校や寄宿制教育施設などで司祭による性的虐待の数々が明るみとなりさらなる打撃となった。

とはいえ、現在でも憲法第 41 条には「国家は国家の崇拜の対象が全能の神に向けられていることを認める。国家はその御名を崇め、その教えを尊び重んじる」とあり、国家と宗教の関係が完全に断絶したわけではない。さらに、続けて「家族」が社会における最も優先される単位であること、そのため「家庭を守る性」としての母性を国家が保護することがうたわれている。そのため、母体に危険がみられる時をのぞいて、中絶は認められていない。国連は、限定的な中絶法も含めリプロダクティブ・ヘルスに関する女性の権利について国内議論を促進するよう勧告をだすなど「外圧」もいっそう強まっている⁸⁾。中絶は 1992 年の国

民投票においても否決され、教会が人々の生活に与える影響は今でも強固な側面がある。アイルランド社会の求心力としてのカソリック教会の力は、様々な社会的変化にさらされつつも、いまだ大きな影響力を持ち続けているといえる⁹⁾。

3. アイルランドにおけるジェンダー研究

70 年代以降の女性運動の興隆は、アイルランドにおけるフェミニズム研究や女性学、ジェンダー研究にどのように影響を与えてきたのだろうか。

森尾は、「アイルランドの大学における『女性学』講座の動向」において、1978 年まで「測量不能な形のようなもの」であったと述べている¹⁰⁾。その 1978 年には森尾がパイオニア的エッセイ集であるとする『Women in Irish Society : The Historical Dimension』が著される。UCD の歴史学者 M. マカーティン（Margaret McCurtain）は、「多くのアイルランド女性は歴史的アイデンティティとか農村社会のなかの女性の役割とかを学ぶことは困難である。なぜなら、自由に評価する技術も、進んで利用できる情報も持ち合わせないのだから」と述べているとする¹¹⁾。森尾は、「伝統主義と近代化主義という相反する勢力の戦いが、国家における女性の社会的に規定された地位を超えて戦われてきたのがアイルランドであり、そこでの女性学出現に対する抵抗は特に顕著であった」とする¹²⁾。長い間、大学内のフルタイムのポストを得ることは困難であった。そのため、アイルランドの女性学の発展の特徴は、80 年代以降の市町村や地方をベースとした教育プログラムが先行していたという点である¹³⁾。そのため、大学に女性学やジェンダー研究のコースが定着していくのは 90 年代になってからであるといえる¹⁴⁾。

4. ケルト的アイルランドとジェンダー

K. リストン（Katie Liston）は、歴史家や多くの社会学者、政治家は、アイルランド女性の社会的地位について、カソリック教会の下での抑圧や

家父長制の側面を強調しすぎてきたとする。既述したように、カソリック教会による女性への社会的規制は非常に強いものであったが、リストンは、歴史的には女性が強い力を持つこともあるなど、アイルランドにおけるジェンダー関係は複雑で重層的であり、従来のフェミニズム研究においてはその点が見逃される傾向があったとする¹⁵⁾。

ケルト社会においては、男性の王と戦う強い女王や重要な預言者などが見られ、プレホン法と呼ばれる法制度の下で女性が結婚の際に持参した物の所有権は夫の所有となるのではなく終生保持することができた¹⁶⁾。また、独立運動においては、女性義勇軍「Cumann na mBan」が1914年に設立されナショナリズム闘争に身を投じた。

カソリック的アイルランドが近代国家形成過程において重要なナショナル・アイデンティティであるとすると、他方では、19世紀後半に同様に広がるケルト的アイルランドの回帰を探求したゲーリックリバイバルもナショナル・アイデンティティの別の現れである。アングロアイリッシュといわれるイングランド人を祖先とした知識人を中心に広がった運動であったが、ロマン主義的色合いを帯びつつも、ケルトへの回帰というテーマは大衆にも共感され、ナショナリズムの勃興を後押しするのである。英国が支配する以前のケルト的アイルランドへの回帰の希求と、独立後の国家基盤となるカソリック・アイルランドはどのように折り合うのだろうか。ここには、アイルランドにおける支配階層の複雑な絡み合いがみられる。A. ベアナー (Alan Bairner) は、歴史的にも地理的にも近接するイングランドとアイルランドにおける支配階層の文化的共有、近親関係について言及している¹⁷⁾。また大野は、ヴィクトリア朝英国中産階級の価値観を共有したカソリック教会の家庭観を見いだす。それは、すなわち男性の社会的優位と「女性には『家庭の天使』としての道徳観を押しつけるもの」であった¹⁸⁾。そのうえで、大野は、19世紀アイルランドがナショナリズム運動を展開していく中で、「カソリック色を強めていくとともに、イギリスの経済・社会的構造を模倣する形

で、初期ケルト以来残っていた - もし、少しでも残っているとすれば - 『強い女性』像を、完全に打ち砕いた」とするのである¹⁹⁾。そして、大野は「いささか単純化して言えば」と断りつつ、「『抑圧的な父』たるイギリスを駆逐したのち、アイルランド男性たちは自ら『強い父』となって新しい国家を支配することに没頭したのであった」²⁰⁾。独立運動の際には義勇軍を結成しともに戦った女性たちであったが、独立後の国家における女性の地位と発言権は、1935年に女性の選挙権を含む市民権が整備されたのにもかかわらず、法的に大きく制限されていくのである²¹⁾。

5. ゲーリックゲームスとジェンダー

このような女性の社会的位置づけは、スポーツにはどのようなものとして現れるだろうか。

ヴィクトリア朝中産階級の価値観は、スポーツを通して英帝国の植民各国に広がっていくのだがアイルランドにおいても例外ではなく、上述したように地理的近接性による支配階層の相似性により、近代スポーツの理念もまた共有されるといえる。例えば、ダブリン大学トリニティ・カレッジで最初につくられたクラブはクリケットであり(1835年)、サッカーは1883年につくられる。皮肉なことに、1884年に独立運動やゲーリックリバイバルの影響の下で発足するゲーリック・アスレティック・アソシエーション(GAA)も、ヴィクトリア朝のアスレティズムに傾倒したM. キューザック(Michael Cusack)の活躍によって設立される。P. ラウズ(Paul Rouse)は、1880年代にはラグビーとクリケットを好んでいたキューザックが、政治的社会的影響から、「ハーリング」にアイルランド的なものを見だし、それがGAAの設立に大きく拍車をかけるとしている²²⁾。紀元前12世紀から存在するといわれるハーリングにまつわるケルト神話が影響していることは明らかだが、他方で、高校の体育教師であったキューザックがアイルランド語で「アスレティック」という言葉を選び、「ハーリング」という英語の呼び名

が定着していたことから、GAA が英国的アスレティズムをその当初から帯びていたことがわかる。他方で、GAA はパリッシュ [教会区] に基盤をおき、教会との結びつきも深めていく²³⁾。そのもて、GAA は、各地に広がっていたハーリングのルールを整備し統ルールを適用する。また、ゲーリックフットボールについては、E. キンセラ (Eoin Kinsella) は、GAA によって組織されるまでは「はっきりとアイルランド的であるとはいえなかった」としている²⁴⁾。このことから、GAA がその理念に「アイルランド独自文化の保全と外国 [すなわち英国] 文化の駆逐」を掲げていたにもかかわらず、ヴィクトリア朝的英国中産階級のイデオロギーを反映していたことがわかる。

さて、以上のことは女性のスポーツ環境とどのように関連するのだろうか。現在、最も人気があるゲーリックゲームスは、ゲーリックフットボールとハーリングであるが、実は女性については、GAA と連携をとりつつもそれぞれ別組織になっている。また、女性版ゲーリックフットボールは「レディス・フットボール (Ladies Football)」、ハーリングは「カモギー (Camogie)」と呼ばれる。カモギーの由来は、アイルランド語のスティック caman による。女性版は男性よりも短いものを使用しており、それが camog であった。いくつかの呼び名があったが、既述したように男性版は英名が定着し、女性版は 1905 年に組織が設立されたときに、英語式つづりのアイルランド語を採用した。女子ゲーリックフットボール協会はフェミニズム運動が広がる 1974 年に設立する。ゲーリックフットボールが、より「男らしさ」と結びついてきた競技だったために、男性だけではなく女性からも反発があったとされる。そのため一時衰退し、1990 年代になって定着していく²⁵⁾。

6. 「男性の保護区」とジェンダー

リストンは、アイルランドにおけるフェミニズム研究においては、スポーツの研究も見逃されてきたとして、スポーツにおけるジェンダー関係に

焦点をあてている。リストンは、スポーツが社会活動として重要な位置づけを占めるアイルランドにおいては、E. ダニングのいう「男性の保護区」としての性質がいつそう当てはまるとする。「いくつかのスポーツ分野は・・・男性的攻撃性の合法的な表現のための、肉体的勇気や力の使用と誇示をとまなう伝統的な男性のハビタスの生産と再生産のための飛び地を代表するようになる」とダニングは述べている²⁶⁾。さらに、ダニングは、第一に、社会の重要な制度が暴力の行使を承認し、実際、賛美する限り、男性の権力は強化し、反対に、社会のルールが、暴力が広くタブー視される程度に実施されれば、弱化するとしている。また、第二に、男性が公的領域で名誉を与えられるような男性自身の制度 (男性の保護区) を持つ限り、男性の権力は強化し、反対に、そのような制度が統合されれば弱化するとしている。これを、近代アイルランドにあてはめれば、独立運動前後の社会は、激しい内戦も含め暴力的で男性性が強化される社会であったのに対し、独立後の国家形成の過程では肉体的暴力は限定されていくといえる。第二次世界大戦では、中立国となり、現在も国連平和維持軍へ防衛軍を派遣しているが、北大西洋条約機構 (NATO) には加盟していない。このプロセスを「平和化」と重ねあわせることができるのではないだろうか²⁷⁾。また、60 年代の世界的な女性運動は、70 年代にアイルランドにも影響を及ぼすが、その社会全体の変化は、「男性の保護区」への女性の参加を可能にしていく。リストンは、ダニングに依拠して、アイルランド社会全体の変化の中で、男女の権力バランスの変化が生じた過程ととらえている。ダニングが述べる社会の「女性化 (feminization)」= 平和化が見られるのである²⁸⁾。そこには、男性側においても、女性のスポーツを容認していく動きがみられ、それぞれの自己像の変化ももたらす。そのため「飛び地 [保護区]」として存在してきた男性スポーツ (特にラグビー、サッカー) などにおいて、反発や葛藤を含みつつも女性プレーヤーの存在が容認されていくことになる。また、女性のスポーツへの進

出は、選手から徐々に既存の組織での事務、メディア、コーチ等と組織それ自体への統合が見られる点に、リストンは、N. エリアス (Norbert Elias) の「定住者とアウトサイダー」理論を適用している²⁹⁾。

リストンは、特に男性のスポーツというイメージの付与が強いラグビーについて取り上げている。アイルランド・ラグビー協会 (IRFU) では、いかに女子ラグビーとの連係を深めてきたかを年次レポートで強調している。アイルランド女子ラグビー協会は、2001年にIRFUに正式加盟し、2008年に完全統合される。リストンは当初の予算配分や扱い方には大きな差があったと指摘しているが、女子ラグビー人口の増加をうけ徐々に積極的に後押しすることになる。協会登録人数は13,199人 (国際ラグビー連盟、2009年8月1日現在) であり、日本女子登録人数995人と比較すると、その普及の度合いは大きい。だが、年代別にみれば、10代以下が1万人で、10代1,400人、成人が1,799人となっており、男子の、10代以下38,642人、10代37,615人、成人25,171人と比較すると、世代間のバランスには偏りがみられる。このような偏りは、リストンが指摘するように、ティーンエイジャーになるにつれて「女の子らしさ」を求められる社会的圧力を感じることによって、「男らしさ」のイメージの支配がより一般的なラグビーという競技から離れていくことが理由の一つとして考えられるだろう。他方で、IRFUによれば、2008-09年の競技人口は飛躍的に発展している³⁰⁾。これは、アイルランド男子ラグビーの世界的成功を反映していると考えられるが、女子ラグビーだけではなく、タグラグビーやミニラグビー (少年少女) なども広がりを見せており、以前の中・上流階級の「男らしさ」のイメージが弱くなり、より「競技指向」を見せているのではないかと推測できる。そこに「男らしさ」のイメージの変化を見ることができる。プロ化によって、「マッチョな」イメージが強化される一方で、「階級的な男らしさ」が薄れ、「競技指向」が前面に出ることによって、アスリート指向の女性が参与しやすい環境に

なっているとも考えられる³¹⁾。

おわりに

他の競技志向のスポーツ、たとえば女子サッカーやゲーリックフットボールなどの普及によって、相乗的な効果がみられることもあり、この点についてメディアの表象の仕方なども検討する必要があるだろう³²⁾。さらに、アイルランド政府によるスポーツ・観光政策、健康キャンペーンなども重要である。芸術・スポーツ・観光省 (Department of Arts, Sport and Tourism) のもと、「スポーツ大国」と銘打っており、2012年のロンドンオリンピックでは、アイルランド選手団の活躍だけではなく、観光・キャンプ誘致などを目指している³³⁾。他方、「Statement of Strategy 2008-2010」における「10%の女性が実際に運動」という調査結果から、国民の運動不足、太りすぎなどへ警鐘を鳴らすとともに、女性のスポーツ参加を促している。

90年代の急激な経済発展により、アイルランド社会は大きな変化を被った。「EUの優等生」は2008年には世界的な不況の影響を受け、人々の社会生活はいまだ大きな変化の渦中にある。近年では、トラベラーと呼ばれる移動民や階級、エスニシティ、同性愛、マスキュリニティ等女性・ジェンダー研究の焦点はより多角化してきている。本稿では、女性の社会的地位の変化とスポーツ、およびダニングの指摘する社会の「女性化」「平和化」とアイルランドにおけるスポーツのジェンダー関係について概観してきたが、今後の動向も見据え、理論的検討も含めより多層的多角的な検討が必要であろう。

【注】

- 1) C. コールター「アイルランドの女性と政策」『ジェンダー研究』河口、河合訳、7号、2004年、42頁。
- 2) T. Inglis, *Moral Monopoly*, UCD, 1998.
- 3) 大野光子『女性たちのアイルランド：カトリックの「母」からケルトの「娘」へ』1999年、平凡社、27頁。
- 4) このときは廃案となり、年齢制限などが撤廃されて、避妊具の購入が一般に可能になるのは1993年以降である。

- 5) 95年の国民投票の以前にも、1986年の第一回目の国民投票において、離婚の是非について争われたが、そのときは破棄された。
- 6) 現在、二期目となるM. マカリース(Mary McAleese)大統領も女性であり、積極的な外交を展開している。スポーツとの関係でいえば、GAA やラグビー、サッカーなどの国際試合には必ず登場し、存在感をアピールしている。
- 7) コールター、56頁。
- 8) 「アイルランド - 第4次・第5次合併レポート」48頁、『国際女性』No.20、2006年。
- 9) 政策決定への影響力はほとんどないとコールターは指摘している。コールター、57頁。2009年10月に再度投票されるリスボン条約の批准についての国民投票では、「中絶が強要されるのではないか」という点も反対派が強調する論点となっている。
- 10) 森尾輝子『エール』(1996/12)(通号16)。
- 11) 森尾、148頁。
- 12) 森尾、149頁。
- 13) 森尾、同上頁。
- 14) ユニバーシティ・カレッジ・ゴールウェイ(UCG)の女性学センターが立ち上げた4年制のプログラムでは1996年に初めての卒業生を迎えた、森尾、154頁。UCGでは、1992年にWomen's Studies Centre reviewを刊行し、1997年にはWomen's studies review、2005年にはIrish feminist reviewと名称を変更して現在でも継続している。その他では、トリニティ・カレッジでは1988年に女性研究センターが設立され、1999年に名称を変更、2005年に人文歴史研究所の正式部署となる。ダブリン・カレッジ・ユニバーシティには、学部横断的な女性研究センターがあり、大学院生が学位を取得できる。
- 15) K Liston, Established-outsider relations between males and females in the field of sports in Ireland, *Irish Journal of Sociology*, 2005.
- 16) 大野、65頁。
- 17) Alan Bairner, *Sport and the Irish : histories, identities, issues*, University College Dublin Press, 2005.
- 18) 大野、119頁。
- 19) 大野、120頁。大野は、文芸復興期の作者たちが「家庭の天使」にふさわしい像としてケルト神話の女性を描いたのに対して、M. ヒーニー(Mary Heaney)などの例を示し、近年の解釈において「強い女性」の復活が見られると指摘している、大野、51-2頁。アイルランド・ナショナリズムとジェンダーの関係について、C. ナッシュ(Catherine Nash)「再地図化および再命名-アイルランドにおけるアイデンティティとジェンダー、景観の新しい地図学-」吉田雄介訳、『空間・社会・地理思想』5号、2000年など参照。
- 20) 大野、210頁。
- 21) 大野、188頁。
- 22) P. Rouse, Michael Cusack: Sportsman and Journalist, *The Gaelic Athletic Association*, M. Cronin(eds), Irish Academic Press, 2009, p. 47.
- 23) 拙稿「スポーツナショナリズム - アイルランドにおけるスポーツ」『越境するスポーツ』高津勝、尾崎正峰編、創文企画、2006年。
- 24) Eoin Kinsella, Riotous Proceedings and the Cricket of Saveges: Football and Hurling in Early Modern Ireland, *The Gaelic Athletic Association*, M. Cronin (eds), Irish Academic Press, 2009, p. 15.
- 25) フットボールを楽しむ女性は、それ以前にも各地みられたとされる。だがそれは正式な組織を形成するには至らず、試合は祭りの出し物のような形で行われていたようだ。Liston, 2005, p. 72.
- 26) E. ダニング『問題としてのスポーツ』法政大学出版社、2004年、407頁。
- 27) 次の文献において、70年代以降のアイルランド社会の「女性化」が指摘されている。H. Tovey/P. Share, *Sociology of Ireland* (2nd ed.), G&M, 2003, p.229. また、北アイルランドにおけるジェンダーとスポーツについては、A. Bairner, After the War? Soccer, Masculinity and Violence in Northern Ireland, *Masculinities, Gender Relations, and Sport*, Jim McKay (des), SAGE, 2000.
- 28) Liston, 'Sport and Gender Relations', *Sport in Society*, 9(4), p.619.
- 29) E. エリアス『定住者と部外者』大平章訳、法政大学出版社、2009年。
- 30) IRFU年次レポート、2008-09年。
- 31) Guardian紙は、ニュージーランド・ラグビー代表のオールブラックスの試合前に行われるマオリの儀式「ハカ」が、いかに「マッチョ」になってきたかについて取り上げている。<http://www.guardian.co.uk/travel/gallery/2009/feb/18/haka-championships-new-zealand-travel?picture=343440909>
- 32) Dublin City Council, *The Increasing Invisibility of Women In Irish Sport, Images of Sports Women in Irish Newspapers*, April 2007.
- 33) 国民の73%、スポーツに何らかの形で定期的に参加(運動、観客)しているとしている。Liston, 2006, p.622.